The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜翻訳＞アンドレ・マルチネ著『ステップから大洋へ：印欧語と「印欧人」』（その2：第4章）
Author(s)	Martinet, André; 神山, 孝夫
Citation	大阪外国語大学論集. 1998, 18, p. 171-194
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アンドレ・マルチネ著
『ステップから大洋へ－印欧語と「印欧人」－』
（その２：第Ⅳ章）

神　山　孝　夫　訳

André Martinet:
Des steppes aux océans
— *L'indo-européen et les ≪Indo-Européens≫*—.
(Paris: Payot, 1987, 1994².)
(Deuxième partie: chapitre IV)

Traduit par Takao KAMIYAMA

小文は本誌第１７号p.63－95に掲載された同書訳「その１：第Ⅰ～第Ⅲ章」の続編を成す。本学助教授清水育男氏にご教授及び資料の提供を賜った。記して謝意を表する。

本訳稿も、「その１」の場合とほぼ同様に、訳者が担当する本学大学院言語社会研究科（旧外国語学研究科）の授業の副産物である。参加者は同研究科在学中の山尾あすか、宮本順一郎の両氏、及び同研究科の修了者下郡健志氏、修了者かつ本学非常勤講師北岡千夏女史の四名であった。「その１」の場合とほぼ同様に訳稿と註釈には神山が準備したものをほとんどそのまま採用したが、参加者、特に宮本氏と下郡氏のご意見を取り入れた箇所もある。

今回は第Ⅳ章と第Ⅴ章を寄稿するつもりで原稿の準備を進めたが、その分量が制限（400字詰め原稿用紙換算100枚）のほぼ三倍にまで達してしまい、一括しての掲載は不可能であることが判明したため、急遽第Ⅴ章は次の機会に譲ることにした。文末に添えた参考文献の補遺には第Ⅴ章の註釈作成に使用したものも一部含まれるが、ご容赦を賜りたい。

略語補遺

Hind.	ヒンディー語	OIs.	古アイスランド語
Hun.	ハンガリー語	Por.	ポルトガル語

第Ⅳ章
言語学のデータと考古学のデータ

4.1　すでに述べたように、印欧諸語を比較することによって、それらが分化する前の時代に対し、一連の語の形と、それらの語が当時持っていたと思われる意味が再建されることになった。例えば、「父」については *pətēr という形態と、単なる「父親」に留まらない家父長制の長という意味が再建される。この作業が首尾よく行われれば、その言語を話していた社会の性質、その生活条件、及びその生息環境の諸特徴についての概念が得られるはずである。【一例をあげてみよう。】ローマの高位神官は pontifex と呼ばれていたが、pānifex が「パンを作る人」すなわち「パン屋」を表すように、この語はラテン語で文字どおりには「橋を作る人」が原義である(1)。他方、比較によって pont- という語根は本来道を指していたことがわかる(2)。このことから、ラテン人の祖先は道が橋のような形をした地域に住んでいたと、そして恐らくそれは沼地を横切るためであったろうと想像され、したがって、彼らはイタリア北部の【ポー川下流湿地帯の青銅期時代の遺跡である】テラマーレの居住者だったのではないかと考えられるのである。

4.2　このようにして、かなり初期の段階から比較【言語学】のデータを原始社会の空間的・時間的再建に利用することが考案されたのであった。[1](3)

海と湖

4.3　例えば、池から始まって海に至るまでの大小様々な水の溜まった場所の名称を例に取ってみたいと思う。フランス語では、果てしなく広がる mer「海」と、より規模の小さな水が溜まった場所である lac「湖」とが明確に区別され、さらに小さいものは étang「池」と呼ばれている。mer はラテン語の mare に遡り、この語はフランス語の場合とほぼ同様に lacus と対立している。他の印欧語に文証される諸形態によって *mor という基底形が想定され、これはほとんどの場合に様々な派生語の中に現れる。この語根は多くの言語に見られるが、外海を含めて本来の意味での海のみを指したわけではない。例えばゲルマン語では、この語が用いられる場合、たいてい湖か池の意味となっている。オランダ語で、干拓される以前にあった「ハー(ル)レム海」【Du. Haarlemmer*meer*】などは小さすぎて湖と呼ぶのさえもはばかられるほどであった。英語の古語あるいは方言の mere(4) は人名の Winder*mere* にも現れるが、これはもともとイングランド北西部の湖水地方にある小さな湖のことであった。「海」の意味でのドイツ語 Meer の用法を見てみれば、この語が本当に海の現実と関わりを持っている民族古来のものではないことが明らかである。ドイツ語には同じく「海」を表す語に See がある。これは「海」の意味では女性名詞、「湖」の意味では男性名詞であって、どちらもフランス語【mer（女性）と lac（男性）】の場合と同様だが、恐らくこれは偶然の一致ではない[2]。英語では sea が lake と区別されるが、その事情はフランス語の mer と lac の場合と同様である。ゲルマン語固有のこの語【Gmc. *saiwiz】(5)

があるため、スカンディナヴィアでは *mor が失われてしまったが、そこでは英語の sea に比べてこの語の意味が幾分か縮小したようである。デンマーク語の sø は湖や穏やかな海を指し、これと対立する hav は荒れ狂う、すなわち潮位が上がったり下がったりを繰り返す海を示す。この語は恐らく hæve「持ち上げる」、英語 heave 、ドイツ語 heben [6]と関係がある。Østersøen と Vester*hav*et はこれらにそれぞれ「東」と「西」を意味する第一要素を付加した語であるが、前者は【穏やかな】バルト海を、後者は【荒れた】北海を表している。ゴート語で「海」は mari からの派生語【marei】で呼ばれる。この mari という要素は saiws（E sea、G See）との合成語である marisaiws「湖」にも現れている。saiws も同じく「湖」の意味だけで用いられる。

4.4　ケルト語で *mor は非常に古い時代に、ガリア（ゴール）語の Are*mor*ci に現れる。これはアレモリカ【＝現在のブルターニュとノルマンディー】の住人を指し、「海辺の民」を原義とする。同様の例に *Are*late「アルル」（Arles）があり、これは「（クロー）平野のそば」の町の意であった。ara-「～のそばに」はギリシア語の pará に相当し、-late はギリシア語の platús【広い、平らな】に等しい。どちらの要素においてもケルト語における語頭の p- の規則的な脱落が生じている。その前者は例えば【F】*para*llèle【<Gk. *pará*llēlos；原義は】「お互いに並んで」に現れる。より新しい時代に文証される言語であるブルトン語とウェールズ語においては mor は「海」の意味となっている。他方、アイルランド語には muir【/mirʲ/】の他に大洋あるいは外洋を表すもう一つの語【faraige/fárəgʲə/】がある。また、湖の意味ではアイルランド語、スコットランド・ゲール語 loch【[lɔx]】やブルトン語 loc'h【/lox/】の他に、ブルトン語 lenn、ウェールズ語 llyn【/ɬin/及び Ir. linn/lʲinʲ/】がある。

4.5　スラブ語においては、事情はラテン語と同様であって、海を表す *mor-(R more)と湖を表すもう一つの語(R ozero)とがある。バルト語には *mor- の派生語【e.g. Lith. mãrios(pl.)】もあるが、普通は新たな形【e.g. Lith. jū́ra】が用いられている。インド・イラン語においても事情はほぼ同様で、*mor の痕跡が見られるのは派生語の場合に限られている[7]。ギリシア語では「海」を表す唯一の語は thálassa、thálatta であり、これが印欧語起源であるとすれば「底」が本来の意味であろう。同じ語根[8]が英語の dale、ドイツ語のTal「谷」及び古代スラブ語の dolъ「底、穴」[9]に見られる。ちなみに英語でも海を the deep「深部」と表現することがある。ギリシア語における thálassa と límnē「湖、池」の対立は明白であり、後者は大洋の波よりもむしろ沼地の泥を想起させる語根を含んでいる[10]。

4.6　これらに加えて、*mor という語根から、湿地(marais)を示す併用形あるいは派生形等が作られていることも考慮する必要がある。フランス語の marais【OF marasc, maresc】自体も、英語の marsh【OE mer(i)sc】と同じく、ゲルマン（祖）語のmar-isk に遡る。古い長母音を持つ英語の moor も本来は湿地を表していた[11]。

4.7　以上すべての結論として、ここまで基底形 *mor と呼んできた印欧語地域に広く見られる

形態が、もともとは湿地帯であろうと、見渡す限りの大海原であろうと、その差を一切考慮せずに水の溜まった場所一般を指したに違いないと考えられる。したがって、大海原との付き合いを物語り、また湖や池と海との区別をもたらすこととなる、本当の意味での海の生活は知られていなかった、ということになろう。大きく波打ち、荒々しく砕け散る波を持ち、またそのために航海に非常に適している海というものに接して、【ことばの上でも】何らかの区別をする必要が生じたのである。それは、ラテン語やスラブ語のように、*mor あるいはその派生語を、湖を表す語【Lat. lacus, R ozero】と対立させる形で行われることもあったし、ゲルマン語のように*mor を湖や池の意味に限局させて、これを海を表す新たな語【e.g. E sea】と対立させることもあった。後者は外海を表す他の語によって置き換えがきくのである。あるいはまた、ギリシア語のように新たな二つの語【海 thálassa と湖 límnē】をもっぱら用いて、*mor を用いなくするような方法もあった。

ぶな

4.8 数多くの想像の対象となってきた語に、ぶなを表す語【IE *bhāg-o-】がある。これはラテン語では fāgus であって、古仏語に fou の形で見いだされ、そこから指小形 fouet や動詞 fouetter【（ぶなの枝で）鞭打つ】が生じた。これと対応し、同じ意味を持つ語にドイツ語の Buche【<Gmc. *bōk-ō-】がある。ここからの派生語に das Buch「本」【同様に E book 等】と Buchstabe「文字」があり、後者は「ぶなの棒」【Cf. Stab「棒」】を原義とする。両者とも伝達すべき情報を刻み込むのにぶなの木と樹皮を用いたことに起因している。ゲルマン語はすべてぶなに対してこの語を用いており、時には英語の beech やデンマーク語の bøg のように若干の変容が行われている場合もある(12)。ゲルマン語のこの語はスラブ語に、ラテン語のそれはケルト語にそれぞれ借用された(13)。ギリシアではぶなが生育せず、語源の同じ phēgós がオーク(14)を表した。ドイツ人研究者の中には、印欧語族の源郷を西に持ってこようとして、ケーニヒェスベルクすなわち今日のカリーニングラードとクリミア半島を結ぶ線の北東側にはぶなが育たないと強調する者もいた。これに対して起こった反論に、木の命名というものは、植物学的特徴ではなく、むしろその木や木の実の様々な用途に従った利用法に基づいて行われるものだとするものがあった。fāgus, Buch, phēgósの基底形【*bhāg-】はギリシア語の phágein(15)「食べる」と比定することが可能であり(16)、穀物摂取が始まる以前に、主な食料の一つだったと考えられる、ぶなやかし、くぬぎなどのどんぐりの実る木を、この語が表した可能性もある。このような視点を取れば、この語の起源や分布はぶなの存在とは無関係となろう。にわとこを表すスラブ語の形(17)との比定は明確さに欠ける(18)が、スカンディナヴィアでもこの木の実が食されていた事実はこの比定が正当であることの傍証となるであろう。

魚

4.9　様々な言語における魚の名称をもとに、源郷に関しての結論を導き出すこともできるが、それらを検証してみれば、このような考察が非常に仮説的であることがよくわかる。【印欧語の】領域の中心部である、バルト語からギリシア語及びアルメニア語にかけて初原的基底形(19)からの派生語が見られる。言語学ではこの基底形が巧妙に同定されるが、これがかなり短く、不安定な音素(20)から成り立っているため、その形態的一致が崩れやすい。判断材料とされるのは、ギリシア語 ikhthûs (21)、古プロシア語 /zuk/【e.g. suck-a-ns(複対)】、リトアニア語 žuvìs（ただし構成要素としては žuk-)、アルメニア語の jukn (22) である(23)。この点で、北方と南方の諸言語の関係が伺い知られるようなスラブ語のデータが期待されるところなのだが、実はスラブ語すべてには明らかに後代の語しかない。ロシア語の ryba はドイツ語の Raupe「芋虫」や Aalraupe「カワメンタイ」と比定され(24)、タブーのために言い替えられたのではないかと考えられている。東方には、サンスクリット matsya、イラン【Av.】masya のような形があり、これは魚の表面のべたべたした感じを思い起こさせる(25)。西方では、同一の基底形(26)から作られる名称が用いられている。これはラテン語の piscis (27)、ゴート語の fisks (28)、アイルランド語の iasc【新正書法 iasc /iəsk/】に現れており、後者にはケルト語一般の語頭の p の脱落が見られる。この【 *pisk-という】形態を、印欧語の領域全般にわたって見られる ap あるいは āp、あるいは ab という、流れる水を表す語【の母音を失った形、すなわちゼロ階梯】に接尾辞 -isk- を付加して派生した形容詞とみなすこともできよう。この語は例えばラテン語には amnis「水流」（< *ap-ni-s あるいは *ab-ni-s)という派生語の形で現れる。そう仮定した場合には魚は「水の流れの生き物」ということになり、【スラブ語の場合と】同様にタブーのために言い替えが行われたのであろうと考えられる。あるいは、このようなあまりはっきりしているとは言えない命名を行っているからには、【魚に対し】いわば無関心であったと考えるべきなのであろうか。そうだとすると次のような説が支持されることとなろう。すなわち、印欧語を話す古代の諸民族は魚に対してある程度の距離を置いており、このような態度を取るからには、古い共通の【＝祖】形が再建できるような魚は一種もいなかったのではないかとも考えられるのである。魚の肉が日持ちせず、魚がまともな食料として扱われるようになったのは薫製や塩漬けのような保存法が発見されてからであることを考えれば、このように魚に執着しなかった気持ちもよくわかろうというものである。一群の人たちがきのこをまったく食べようとしないのにも似て、かつては、魚は疑惑の目で見られていたのかもしれない。

4.10　魚の個々の種類の名前は後代に起源を持ち、それらの分布は印欧語族の語派の分布と全く一致しない。例えばにしん(hareng)の呼び名はドイツ語(Hering)からスペイン語(arenque) にかけての西部ヨーロッパでは一致しているが、デンマーク語 sild、ロシア語 sel'd' のようにスカンディナヴィア諸語とスラブ語では別の名前が用いられている。鱒については、フランス語(truite)と同じ形が英語(trout)からイタリア語(trota)にかけての領域に広がっているものの、

ドイツ語のForelleがスカンディナヴィア【e.g. Sw. forell, Dan. forel】とロシア【forel'】にまで至っている。スカンディナヴィアにはこれと異なる地域的な形（デンマーク語 ørred）があり、またロシア語では「色とりどりの」という形容詞から派生した形(29)も併用されており、これがルーマニアとハンガリーを含めて東部及び中部ヨーロッパ全般に見られる(30)。鯉(carpe) の呼び名はヨーロッパ全土にわたってほとんど同じであり、恐らくドイツの地から広まったようだが、どう見てもゲルマン本来の語らしくない(31)。

4.11　以上により、水のたまったところの名称を検討した折に得た印象がますます強くなる。あらゆる証拠から見て、印欧人は本来的に海に関わりを持っていなかったのである。無論、魚は知られていたが、人々の興味は薄く、疑いの目を向けられ、食料という点では長い間眼中に入れられていなかった。彼らが拡大するにしたがって、日々の糧を調達する上で海産物が大きな役割を演じている場所に到達したのであろう。デンマーク語で言うkøkkenmødding「貝塚」(32)、すなわち貝の中身を食べた後にその貝殻を大量に捨てた場所のことが想起される。しかし征服者の気位の高さを示す痕跡が残っている。福音書の中では魚が重要な役割を演じているのに、教会の見解では魚を食べても断食を破ることにはなっていないのである。そしてこのことが生活手段としての漁業が発達する決定的な要因であったに相違ない。しかし、【印欧語の】領域の東部でも西部でも、そしてスラブ語のrybaに見られるようにその中央部でさえも様々な言い替えが行われたのに、中央部【の一部】においては恐らく古くからの魚の名称（ギリシア語ikhthûs(33) 等）が保持されたという事実をどう解釈したものかは不明である。

王

4.12　上のように中央部に古い形が保存され、周辺部が改新を受けるというような場合もあるが、より頻繁に生じるのは、その逆に中央部における改新であって、その結果として地理的周辺部、すなわち東部と西部に、古い名称が残りやすい。王(roi) を表す語の場合もその一例であり、領域の両端にのみ古形【*rēg-】(34)が保存されている。その一方はサンスクリットのrāj- であって、rajahや大王を表すmaharajah、そのパートナーのrani(35) といったそこからの現代の派生語がよく知られている。もう一方はラテン語のrēx【<*rēg-s】とケルト語である。前者はフランス語のroiの源であり、後者のガリア語形-rīxがDumnorix（原義は「世界の王」）、Vercingétorix（同「戦士の最高の長」）といった名前の構成要素になっている【Cf. Ir. rí/ rïi:/】。ゲルマン語はケルト語形を借用し、ここからゴート語のreiks（rîks(36) と読む）「候」やドイツ語のReich「候の領地；国家；帝国」やreich「豊かな」といった派生語が生じている。フランス語のriche「豊かな」も後者からの借用語である(37)。【オーストリアのフランス名である】Autricheは古い*Austerrîki「東の帝国」(38)に由来している。これら両端の間の地域では、一族あるいは部族、民族の長は、明らかにその地域の現実にもっと合っている様々な名称で呼ばれている。ゲルマン語で本当の王を表す古形は*kuningaz(39) であり、これはフィンランド語に借用

されて元の形のまま保存されている(40)。ここから英語の king やドイツ語の König が生じた(41)。この形はフランス語の gens「人々」, genre「種類」, engendrer「生み出す」といった語と同じ基底形(42)から作られており、その原義は「一族の長」ということである。ゴート語の thiudans「王」は同じように thiuda「民衆」(43)から作られている。序でながら、副詞の thiudiskō は「民衆ふうに」ということであって、そのように話すことは、ラテン語、より正確にはロマンス語を話す聖職者と一線を画すことであった。そしてここから deutsch「ドイツ語で」が生まれたのである(44)。スラブ語で「王」を表す語の起源となったのは Karolus（Magnus）、すなわちシャルルマーニュ（カール大帝）である。これがロシア語で korol' となる(45)。ギリシア語には basileús という固有の形があるが、その起源は杳として不明である。

すき

4.13　これまで調査を行ってきた諸形態をもとに、印欧民族がかつてまとまりを成していた時代に地理的にどこにいたのかに関して断言できることはあまりない。だが、ある種の改新を調査することによって、一部の【民族】移動が相対的にいつ行われたかについては結論を下し得る。道具を引くこと【など】によって耕作が行われていたことは、【F】araire, aratoire に見られる基底形(46)によって明らかである。この語根は印欧語族に属すヨーロッパの諸言語及びアルメニア語【e.g. araur「すき」】には見いだされるのに、インドとイランの諸言語には欠けているのである。これによって、インドとイランの諸言語を話していた人々はすきが発明されるよりも前に分離していたのではないかと考えられることになる。さもなければ、これらの民族は、長い間放牧生活を営んでいたために、動物に道具を引かせて耕作をすることに関わる語彙を忘れてしまったとみなすべきであろうか。技術が新しくなれば、語彙が新しくなる可能性があるのも当然であって、これはまさに、車輪の付いたすきが、それまでの古い無輪のすきに取って代わったときに起こったことであった。後者は、初期においては木の枝を脇に小枝が一本出ているところの下から切り取って、その小枝の先を切り落として耕すのに用いたのである。古いゲルマン語は「耕す」の意味で基底の ara-【<*arə-】を持っていた(47)が、そのための道具としては英語の plough, plow、ドイツ語の Pflug のような新語をすでに持っていた(48)。ゲルマン語で語頭に p が現れているため、これが借用語であるか、あるいは強意的な形であることがわかる(49)。

考古学のデータ

4.14　考古学のデータを用いて比較【言語学】のデータを補強し、補おうと考えるのも当然のことである[3]。しかし、非常な長期間にわたって、これら二つの学問分野の業績を統合することは大きな難問であった。当たり前のことではあるのだが、考古学者が関心を注いでいたのは、むしろ土器や、それが示す様々な技術、そしてその技術の時間的な進化と様々なタイプの空間的拡大のことであった。困ったことに、このような【土器作成技術の】拡大がたいていの場合に南か

ら北へと行われたのに、歴史的データあるいは比較言語学の結論が示すところでは、【印欧】諸民族の移動はその逆に北から南へと向かったのである。ここから言えることは、北と南に住んでいた民族間に通商関係があったことと、当然だが、二つの異なる地域に同じタイプの土器があるからといって、問題の住民の言語が親近的であるとは結論できない、ということだけである。

4.15　確かに、墓のタイプもまた問題となる。ある、はっきりとした特徴を持つタイプが異なる地域に年代的にずれて現れることが確かめられれば、そのことから民族が移動したのだと結論できる場合もしばしばあることだろう。だが、その場合にも、ある流行がだんだんに広まったのかもしれない。これらの人々の話していたのが何語だったのかはわからない。墓の中で死人に供えられたものは民族から民族への交易の結果得られたものであったのかもしれない。頭蓋骨の長さと幅の比率といったような、遺骸についての一定の肉体的特徴が長い間注目されてきた。頭蓋骨が【前後に】長い、すなわち長頭の人と、頭蓋骨が短く幅の広い、短頭の人の区別が行われた。今日定住している人々の中でのこの種のデータと発掘された遺骸についてのデータとを比較検討して、移動の方向がおよそつかめた。しかし、長頭であるとか短頭であるとかいったことから何語が話されたかの判断ができたのであろうか。そもそもその根拠は証明不可能な仮説なのである。

4.16　考古学と時間・空間的な印欧人の位置決定との関係についての問題が今日どのように生じているのかを見る前に、西及び中部ヨーロッパにおける文化の移動についての考古学的データをさっと概略しておくのもおもしろいかもしれない。ただし氷河期以前については触れないことにする。

新石器文化

4.17　まず考慮すべきなのは新石器文化の拡大である。この文化の特徴は、その名称から想像されるような、火打ち石の新たな使用法ではなく、採集から農耕への移行である。しかし、まだ金属は現れておらず、道具は石で作られていた。このような拡大は、模倣によって異文化が徐々に伝播し、浸透することによって生じたのだろうか。あるいは住民が移動することによって、すなわち農民が農耕に最も適した土地の層が疲弊するたびに移動を行ったために生じたのだろうか。確実なことはほとんど何も言えず、恐らくその両方を想定する必要がある。ヨーロッパの新石器文化は紀元前第七千年紀にバルカン半島とドナウ平原に現れた。その起源がオリエント付近であったことは間違いない。この文化はドナウ川流域地帯から広がったらしく、この点については以下【4.23ff.】で現在の世界を形作ったヨーロッパ文化へのその基本的貢献の評価を行う際にもう一度触れる。この地から紀元前第五千年紀にイタリアへ、プロヴァンスへ、さらにはイベリア半島へとこの文化が広がった。他方、北上した波はドイツ、スカンディナヴィアへと至り、その後西へ進路を変えて、オランダ、フランス北部、大ブリテン島へと到達したのである。

4.18　北から伝播したのであれ、南からであれ、西ヨーロッパに新石器文化が完全に定着するのは紀元前第四千年紀の間である。しかし、深く定着した時には、この文化はすでに数世紀にわたっ

て、その起源たるドナウ川流域の地において、ユーラシアのステップからの圧力にさらされていた。恐らく、この圧力の原因は民族移動であり、これによってヨーロッパ西部への新石器文化の定着が早められ、また強化されたのである。新石器文化の定着は、ガリア人であれ、ローマ人であれ、あるいはフランク人であれ、連続する波となってやってきた印欧語を話す制服者の到来よりも、はるかに恒常的に、後の経済的進歩を促すこととなった。

巨石文化

4.19　東から西へと広がって行った新石器文化は、南から海岸線を北上してくる巨石文化の圧力と対峙することになる。この文化は、何物にも増して明白な痕跡を大地の上に残している。巨石とは読んで字の如く大きな石のことで、ブルトン語で men hir [50] と呼ばれ、孤立している場合も、ブルターニュのカルナックにあるもののように列を成して一塊になっている場合もある。いかなる目的でこれらが建造されたのかはよくわかっていない。恐らくは宗教儀式が行われたのだろうと考えられている。他方、メンヒルの他に「石卓」すなわちドルメン（dolmen）[51] と呼ばれるものもある。これはもともと大地に埋まっていて、内部が洞穴状になっており、現代の地下墓所にも似て、遺体の安置場所になっていた。ちなみに、そこに安置された複数の遺体はそれぞれ別々の時点で死んだ人々であって、権力者の死に伴って殉死させられた人々ではないらしい。巨石文化が東方（オリエント）にその起源を持つのは間違いないが、どのようにして西方に広がったのかはつまびらかでない。ヨーロッパにおいては紀元前第四千年紀にヒスパニアに始まったらしく、その後ブルターニュとフランス西部、ブリテン諸島へと至り、最後に、紀元前三千年紀になって北海沿いにデンマークにまで到達した。これは人間自体が移動することによってもたらされたのであろうか。あるいはキリスト教の伝道と同じような過程を経て、同じことばを話す人々のもとであろうが、違ったことばを話す人々のもとであろうが、このような行い自体がだんだんに広がったのであろうか。確実なことは何も言えない。上で海の名称を扱った際に述べたことと、他の多くのことを考え合わせると、この時点でこれらの地域にいたのは印欧語を話す諸民族ではなかったということになろう。このような巨石文化の到来と後代の復活とはきちんと区別する必要があると思われる。イングランドのストーンヘンジは後者に属し、例えばカルナックの巨石列などよりもはるかに洗練された作りとなっている。

クルガン

4.20　ドナウ川流域にいたヨーロッパ最古の新石器文化の担い手に話しを進める前に、そして結局は彼らの文化の独創性をよりよく理解することにもつながるのだが、ここで場面をユーラシアのステップに移すことにする。現代の考古学の成果によって、ここにクルガン【1.22】と呼ばれる文化があったことがわかっている。充分な根拠に基づいて言い得ることに、この文化の担い手は、紀元前第六千年紀にウラル山脈とカスピ海の間で、印欧祖語の一形態を話していたと考えら

れる。

4.21　クルガンとは、英語で言えばpit-gravesに当たるが、中に石で作った壁と天井があり、それに土をかぶせた、半地下の墳墓のことである。ここに埋葬されたのは長であり、一緒に葬られた財宝、及び配下の者や妻たちの数からすると、長は豊かであって強い権力を持っていたと考えられる。インドでつい最近まで、死んだ夫を葬るときに、後に残った妻も一緒に荼毘に付されていたのと似ている。クルガンの中に収められた財宝はその土地で作られたとは思われず、恐らくは交易というよりもむしろ略奪によって入手されたものと考えられる。あらゆる点から見て、ここにあった社会では階層の区別が厳格に行われており、支配層にあるのは長だけではなかったことであろう。記録がしっかりと残っている同種の文化における、例えばインドのバラモンやローマの神官【Lat. flāmen】の場合を敷衍すれば、ここでも僧侶は支配層に属していたと考えられよう。その下には戦士階級があり、さらにその下に食料調達の任務を負った牧人の階級があった。しかしながら、新石器文化とその特徴たる農業の洗礼を受けた、より後代の社会構造と同じであるなどと性急な判断をすべきではない。考古学的データから推察される社会構造がこのように複雑であるからには、狩猟と採集だけで支えられているような経済はありえないと言え、このため牧人はステップ中を群れを放牧していたのだと考えるべきである。いずれかの時点で馬が飼い慣らされ、これによって略奪活動が容易となった。二輪戦車（チャリオット）が発明されてはじめて馬が戦闘専用に利用できるようになったのは間違いなく、これによって戦士は安定を得た。騎乗時にこの安定性がもたらされるのは、ずっと後になって鐙が装着されるようになってからのことである。

4.22　クルガンと同じタイプの、殉死者を一緒に葬る墳墓は、ヨーロッパ各地に印欧人の侵攻の跡を残している。これはボヘミアや中部ドイツにも見られ、例えばウニェティツェ(52)のものは紀元前1700年に遡ると推定される。このような墳墓はまたコーカサス（カフカス）北部やトランスコーカサス（ザカフカス）、アナトリアにも残っており、征服者たる印欧人がいずれかの移動の波でここを通った公算が高い。これらの墳墓の年代推定を行ってみても、このタイプの墳墓がいつ生じたのかは全く特定できない。何しろ、考古学的資料が欠落しているためにその諸段階を定めることはできないにしても、側近の殉死は多くの時代を通じて続いたはずだからである。【ベルギーの】トゥルネにあるメロヴィング朝時代のシルデリックⅠ世の墓にも側近が一緒に埋葬されている。古典時代においても、剣闘士の戦いを見物する場面に限られてはいたが、人間を犠牲にすることはよく知られていた。現代の戦争では大規模に殺戮が行われ、祖国や民主主義やその他の抽象概念の名のもとに何百万という人間が犠牲にされているが、こういった行いは永遠に繰り返されて行くものだと改めて気付かされる。人の命が犠牲になっても、我々が憤りを感じるのは、もはやどんな正当化もできないと感じるときだけなのである。

ドナウ平原人

4.23　バルカン半島とドナウ川流域地帯の発掘調査が行われたのはかなり最近のことであり、その結果、印欧人がどのようにしてユーラシアのステップから南西方向へ拡大して行ったのかが以前よりもよく分かるようになった。ヨーロッパの新石器文化の発祥地たるこの地域の文化は、早くも紀元前第七千年紀から発達をはじめたが、紀元前第五千年紀以来、クルガンの遊牧民の侵攻にさらされることとなり、そのためエーゲ海沿岸やクレタ島へと後退を余儀なくされ、紀元前第三千年紀の終わりに至って、ついに印欧人たるアカイア人の圧力に屈することとなった。とは言え、この文化は侵略者の中に根深く痕跡を残したのである。考古学によって明らかになったことに、この文化は征服者の推定される社会構造とは全く正反対であった。ドナウ川流域の新石器文化は母権社会を持っていたらしい。すなわち、そこで最も崇められたのは豊饒を司る母なる女神であり、農業技術や消費物資の生産が武術の実践よりも重んじられていたと考えられる。最も古くからの居住地域には、外部からの侵略に対して防衛態勢を整えていた痕跡が見られない。防備がわずかながら行われだしたのは、その後、好戦的な近隣族からの圧力が繰り返し感じられるようになってからのことであるが、このお粗末な防備も堅牢に武装した騎馬軍団の攻撃の前には全く歯が立たなかったのである。

4.24　この文化が出現したのが上記のように非常に古い時代であったことを思えば、人類の発達史上に占めるこの文化の先進性には驚かざるを得ない。これまで長い間信奉されてきた見解に従えば、例えば文字の分野において、今日の西洋文化へとつながる萌芽が紀元前第三千年紀に見られるのは、メソポタミアとナイル渓谷だけとされていた。ところが実際には、宗教的【～文化的（第二版）】なしるしに端を発する文字の進化をドナウ平原人のもとに辿ることができ、そこから紀元前第四千年紀に音節文字とおぼしき文字が生まれているのである。クレタ島に後に生じることになる文字【複数】(53)の起源はこの文字にあるのではないかとも疑い得る。

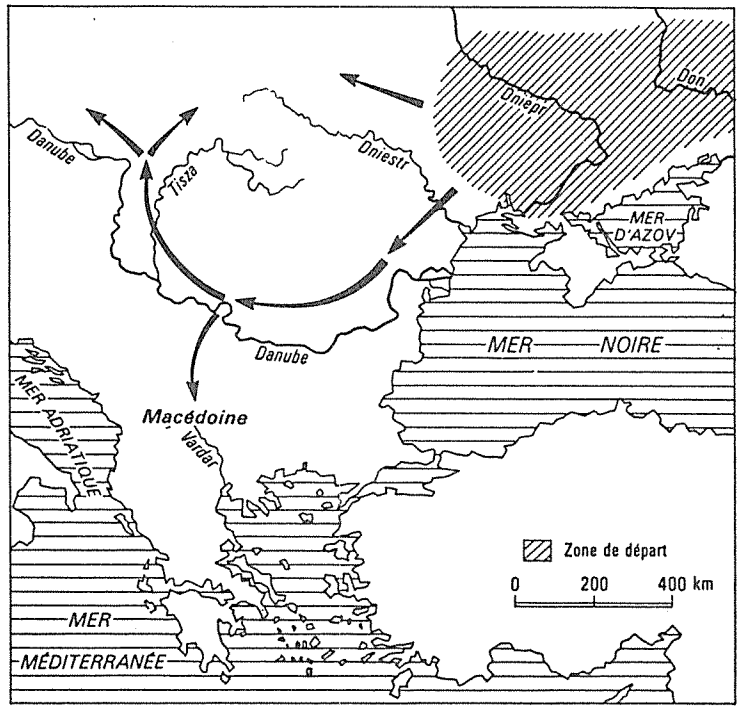
4.25　大まかに、百年単位ではなく千年単位で行われる概説では、ヨーロッパ亜大陸の発達においてドナウ川流域のこの文化が果たしたと思われる決定的な役割が取り扱われることはない。この文化が、誕生してから滅びるまで、二千年以上にわたって存続し、人類の進歩に対し非常に大きな貢献を成したことは間違いないという事実を、声を大にして主張すべきである。しばしばギリシアの奇跡という表現がなされる。思考を阻害し、研究を止めてしまうことにしかつながらないような言い方は控えておくにしても、このかなり顕著なアマルガムを、このようにしか描写しないとは少々幼稚である。ここには創造力があり、ドナウ平原の豊饒と遊牧民の攻撃性との融合から生まれた拡大の気運が見いだされるのである。古代ギリシアに典型的と思われるこのような複合性をもっともよく例示しているのは、その固有の宗教に見られるシンクレティズムである。すなわちそこでは印欧語を話す征服者の男性的パンテオンが、豊饒や知の女神と同居しているのである。その一方にいるのは、天と雷（いかずち）の神であるゼウスをその長とする男性の神々と、彼らの伴侶たる女神たち、すなわち【ローマの】ウェヌス【にあたる女神アプロディーテー】やヘーラー

である。前者の女神は北欧で言えばフレイヤにあたり、「戦士のやすらぎ」とみなされる。後者はローマで言うユーノーであって、ゼウスの伴侶で勇者の擁護者である。ヘーラーも勇者（【Gk.】hḗrōs）も hēr-[4](54)という語根を含んでいるが、これは偶然ではない。もう一方にいる神々は、ガイア、デーメーテール、ペルセポネー、アルテミス(55)、アテーナーといった、大地や豊饒や発明を司る古代ギリシア独特の女神であった。

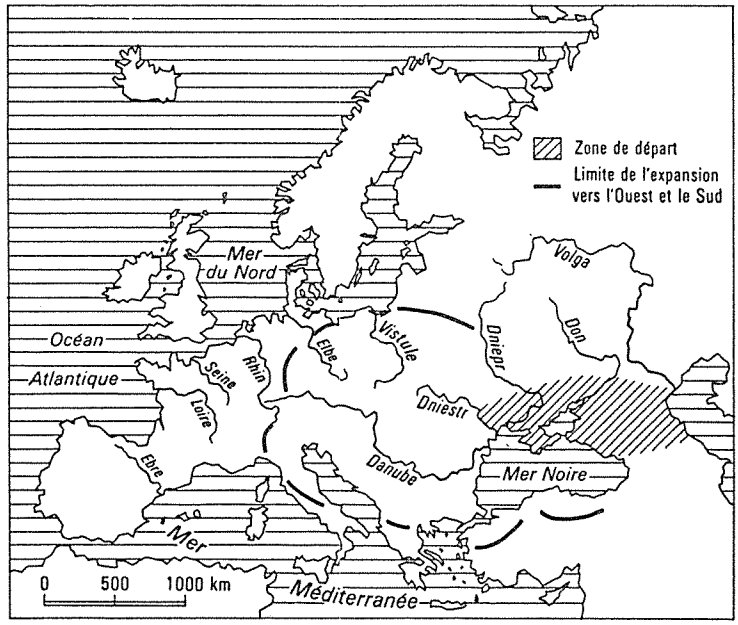
4.26　このような【男性社会の神々と女性社会の神々との】共生は本来、エーゲ海世界の文化の担い手【であるギリシア人】にのみ見られることであった。他の印欧族も移動の途中でドナウ平原にしばらく留まったと考えられるが、彼らは恐らくインド・イラン人のようにこのアマルガムに全く関わりを持たなかったか、あるいはラテン人のように後に借用によってこの共生を受け入れたのである。

ステップ民族の襲来（第一波）

4.27　紀元前四千年紀の終わり頃、ステップ民族がはじめてドナウ川流域地帯に到達した。彼らがあとにしたのはドン川とドニェプル川の下流地帯であったらしい。これは侵略(invasion)と言うよりも、一時的な侵入(incursion）であって、騎馬軍団がこの地帯の一部の地点を支配したのだった。この襲撃の跡が残されているのは、ドナウ川河口地帯から今日のハンガリー平原に当たる地域までのその流域と、南ではマケドニアまでである。地元の住民は時としてかなり手強い反撃をその侵略者に加えたと思われる。最初に侵攻を受けた地域である、ドニェストル川流域、すなわち今日の西ウクライナとモルドヴァの住民も同様の反撃を行った形跡がある。この地域の住人はそれ以前にも東の隣族から攻撃を受けたことがあるのかもしれない。ティサ川流域では、地元住民は隷属せられ、彼らの文化は滅んでしまった。その他の地域の地元住民は、侵略者とある種の妥協点(modus vivendi）に達したらしく、南や西へと後退した。ステップ民族が到来した後に、これらの地域における言語状況がいかなるものだったかを特定することは、当然ながら不可能である。想像できることはただ単に、このような侵入によって新たな民族が大挙して殺到したわけでもないということと、占領者が優位になった地域においても古くからの住民と混ざり合うことが予想されるため、占領者の言語は淘汰されてしまった可能性が高いということだけである。これは、その五千年後にノルマンディーで起こったことと似ている【Cf.2.9】。



原図３　第一波のクルガン族到来（紀元前4200年）



原図４　第二波のクルガン族到来（紀元前3300年）
この移動は大西洋岸及び北海周辺への巨石文化人の拡大と同時期である。

ステップ民族の襲来（第二波）

4.28　ステップ民族がまたやって来たのはそれから約千年を経てからである。これによって、印欧語を話す民族がヨーロッパの大部分を征服することになった。第一波の場合と同じく、今回も地元住民が一掃されることはなかったと考えられる。大抵の場合にアマルガムが形成されたことは疑いなく、言語的に言っても、印欧語がすべての場所で優勢となったわけではない。この新たな波の出発した場所が、第一波のそれよりもずっと東の、コーカサス北方であったのは確実であろう。今回の侵攻は西と南西の方向ばかりでなく、北西方向にも行われ、今日のウクライナ、ポーランド、エルベ川を越えた辺りまでのドイツにあたる地域が占領された。この侵攻はイタリア半島北部と中央部へも達した[5]。南については、マケドニアを越えることは叶わなかったが、小アジアへは大軍がやって来た。ここは後に様々な民族移動の舞台となり、ついには完全に印欧語化されることになる。イタリア半島にラテン語やイタリック諸語の祖先をもたらしたのがこの第二波でないことははっきりしている。

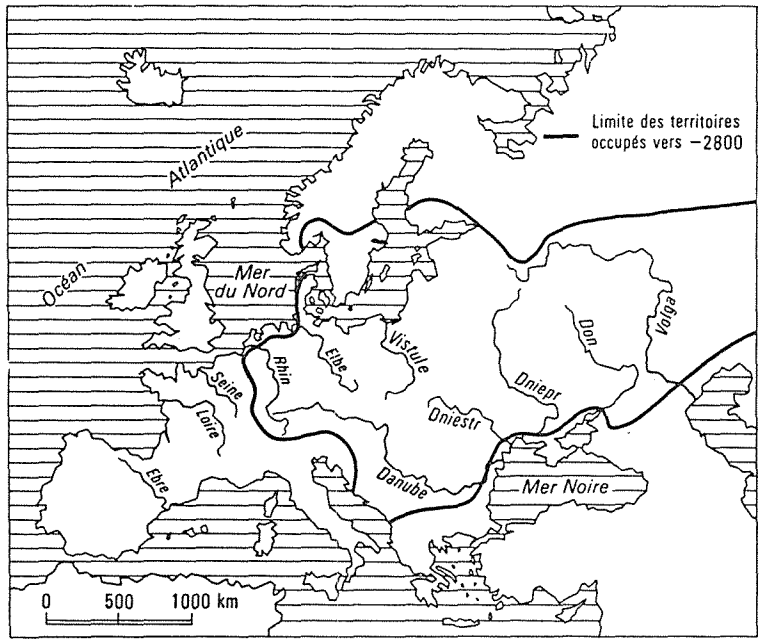
ステップ民族の襲来（第三波）

4.29　さらにその後、紀元前第三千年紀のはじめ、ドニェストル川からウラル山脈に至る地帯から侵略者の第三波が到来し、再度中央ヨーロッパが覆われた。それ以前の波によってドナウ平原にもたらされた印欧語が、特にギリシア語とアーリア語の起源となったのに対し、いわゆる西部印欧語であるイタリック語、ケルト語、ゲルマン語は【第三波たる】北ヨーロッパの侵略者の言語に由来していると考えられよう。この北の地域に、この時期、球形アンフォラと呼ばれる文化があった。この文化はその直後、縄文土器に取って代わられることとなる。後者はルーマニアから北方平原を越えてオランダやスカンディナヴィアにまで広がっていた痕跡がある。これは粘土に縄を押しつけて模様を付けた土器のことである。それとともに銅製の、あるいは金属の道具をまねて磨いた石で作った戦闘用の斧が用いられた(56)。

4.30　縄文土器の西への伝播と時を同じくして、鐘形杯土器の名で知られる別のタイプの土器も広まった。後者はヒスパニアに端を発するらしい。もちろん交易によって広がっていた可能性もあろう。しかし、考古学者の見解では、巨石文化と並行して、それより若干内陸部に広がっていた弓を持つ民族がこの土器を北東方向へもたらしたとする傾向がある。西の文化を持つ民族がこのような活動をしていたと考えれば、北海沿岸とライン川よりも西の地域に印欧語が普及するのが遅れたことにも合点が行く。第二波が起こってから、後のガリアにあたる地域にケルト族が大挙してやって来るまでに、二千年以上が経過することとなるのである。

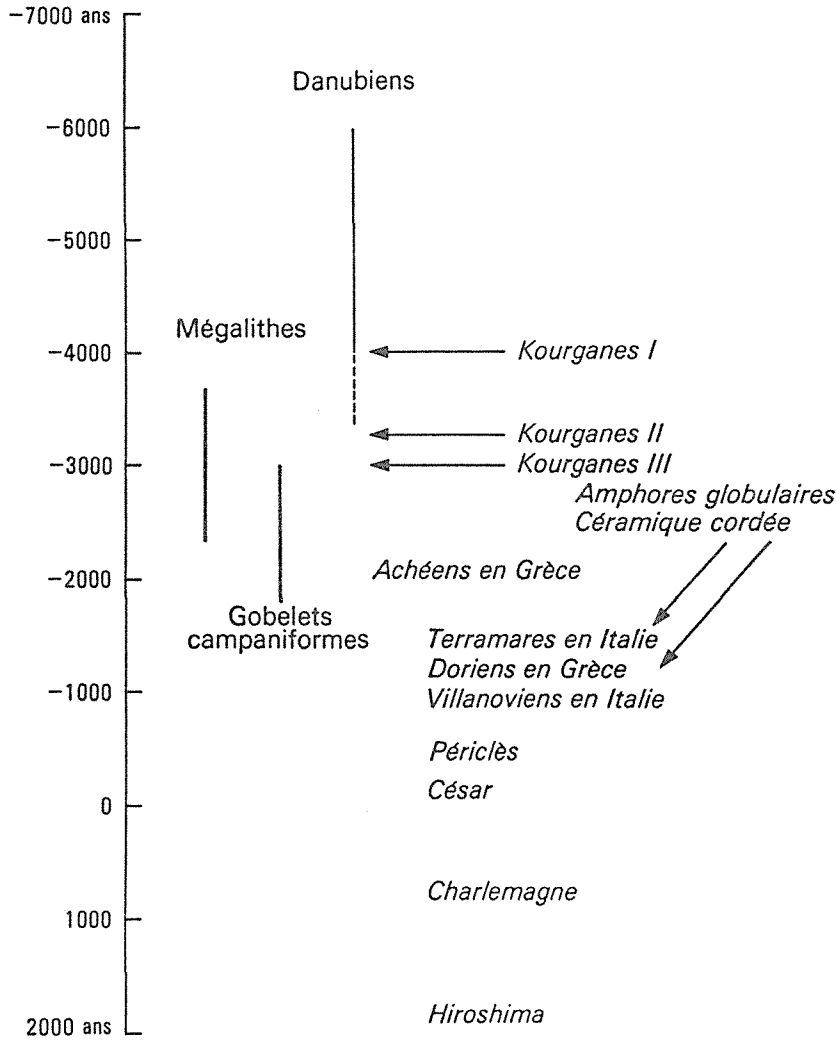
4.31　紀元前三千年紀の終わり頃、【東西には】中部ドイツからウクライナにかけて、【南北には】バルト海からバルカン半島にかけての地帯に、印欧語の諸方言がよく根付いていたと考えられよう。ここでは、これらの印欧語諸方言が先住民の諸言語と競合関係にあったことは明らかだが、住民の中で最も力を持ち、最も活力に富んだ人々は印欧語諸方言の話者であった。当然なが

ら、農業がまだ行われていないか、あるいは遊牧民的な方法で、すなわち定住せずに家庭菜園的なやり方で営まれている土地ではどこでも人口密度は非常に低い。したがって、ある地域によそ者がやって来た場合でも【先住民との】共存共栄は必ずしも不可能ではない。力に劣る側が該当地域の中で痩せた、獲物の少ない場所で満足するなら特にそう言える。アナトリア語を例外として、印欧諸語は上記の領域から広まった確率が高い。恐らく最初にアーリア語が小アジアへと渡り、その後ギリシア語が南下した。ラテン語と、遅れてその他のイタリック語が北方からドナウ川へ、次いでイタリア半島へと至った。続いて、ケルト族が西進し、ゲルマン族は初め北へ向かったが、後にケルト族を追って南下した。

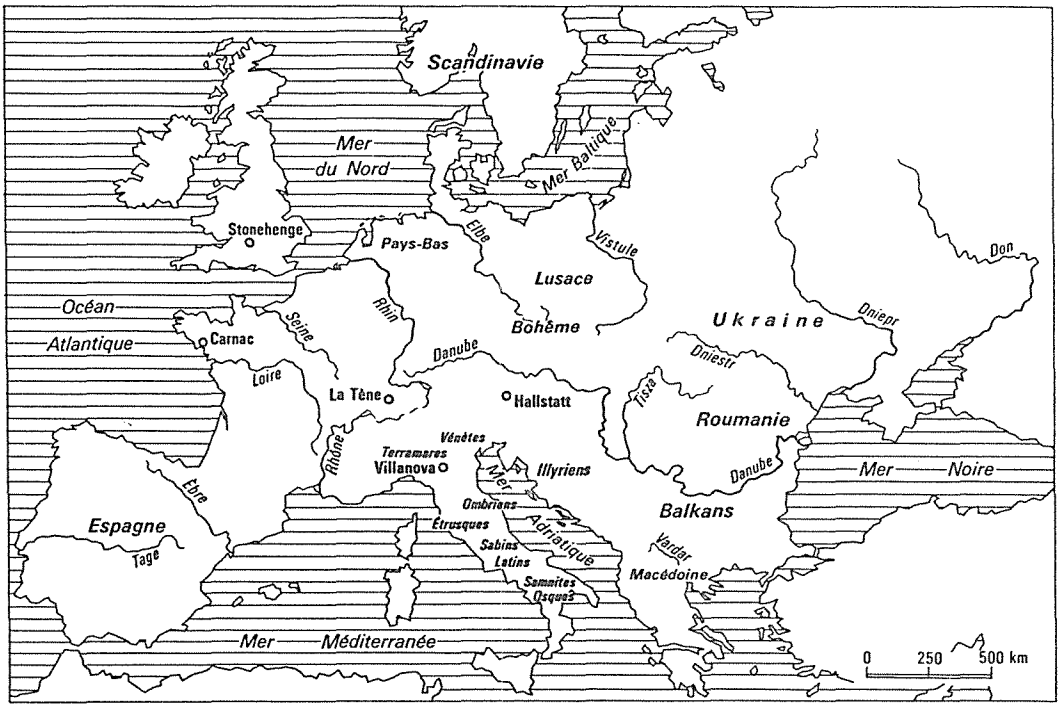


原図５　第三波のクルガン族到来（紀元前2800年）

二回目の到来と比べると、南への侵攻は少なく、他の方向への進出が顕著である。この移動は、弓を持つ民族によって鐘形杯土器がヒスパニアからボヘミアに至る地域に広がったのと同時期である。[6]



原図 6　ヨーロッパにおける文化と移動の年表



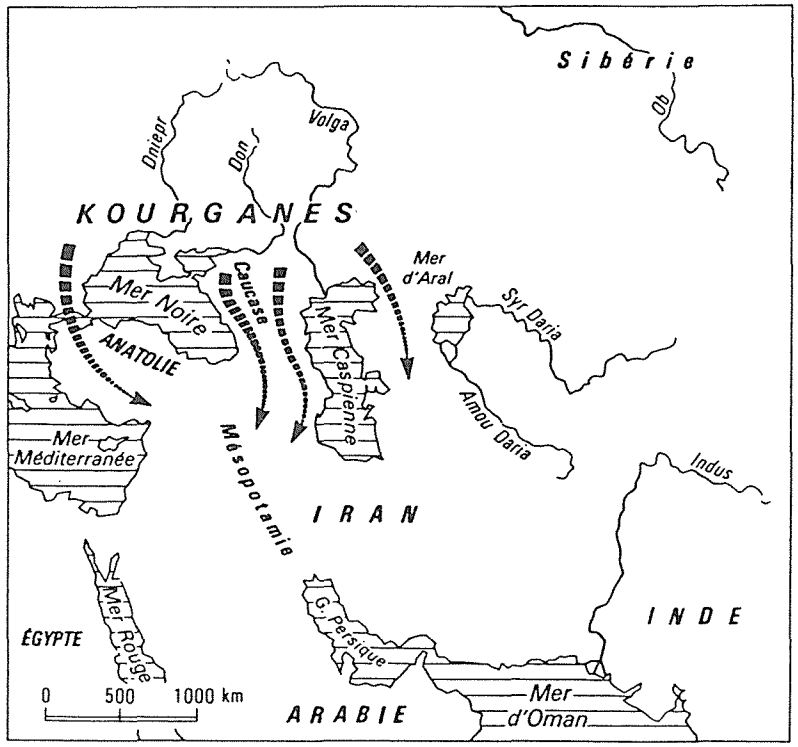
原図７　歴史の黎明期におけるヨーロッパ

歴史の黎明期

4.32　紀元前第二千年紀から第一千年紀への変わり目に、死体を焼いて、その灰を入れた入れ物を墓地に葬る儀式が現れた。このような墓地は火葬墓と呼ばれる。このような墓地は北部平原のラウジッツに見られるが、同様に北イタリアにもあり、ここはエミリア地方から始まったヴィラノヴァ文化の地である。この文化の数世紀前には、その西方にテラマーレ文化があった。その北方にはウェネト人の文化である、いわゆるエステ(atestine)文化があった。これらの文化は何れも印欧語を話す諸民族のものである。テラマーレの住人は最初に南下した人々であり、彼らがラテン人の祖先と考えられよう。ヴィラノヴァ人はエトルリア人を迂回してアペニン山脈沿いを進むことになるが、その後ウンブリア人、サビニ人、オスク人、サムニウム人となる。これらは何れも言語的に特徴のある一つのグループに属している。ウェネト人は長期間にわたってイリュリア人に同化されたが、言語の面ではラテン人と関連がある【Cf.6.14ff.】。文化的にはヴィラノヴァ人と歴史時代にはトスカーナ地方、つまり南寄りにいたエトルリア人との差は少ないが、言語的には両者は全く異なっており、あらゆる根拠から見てエトルリア語は印欧語ではない。

4.33　いわゆる「長剣族」(des longues épées)【Cf.5.26】が北方からヨーロッパを横断してバルカン半島にまで至ったのも、同様に紀元前二千年紀の終わり頃とされている。彼らはさらに地中海を越えてパレスチナに至り、ペリシテ(フィリスティア)人となったと想像されている。[7]

4.34　紀元前第一千年紀に入ると、鉄器時代となる。しかし、鉄も、より古い青銅もまだ用いられていた。この千年紀の前半に、オーストリア中部にある地名ハルシュタットの名で呼ばれるこの時代の第一期が画されている。言語的に言って、ここに登場するのはケルト人であり、ヴィラノヴァ人と同様に彼らも初めは火葬を行っていたのだが、結局土葬の習慣に戻ってしまった。彼らの中心が西に移動を始めるのは、鉄の精錬の必要性が感じられだした紀元前五百年以降のことである。これがラ・テーヌ文化と呼ばれているもので、この命名はスイス高原のヌシャテル湖近郊にある地名に由来している。



原図８　クルガン地域から南東方向への移動

アナトリア人

4.35　小アジアの印欧人はアナトリア人と呼ばれ、特にその中でもヒッタイト人が有力だが、彼らがこの地に至る過程で通ったのは恐らくコーカサスだと思われる。コーカサスのどちら側にも民族移動の障害となるものは何もない。楔形文字が借用されていることにも見られるように、彼らがここでメソポタミア文化と非常に密接な関係を樹立したことは確実である。インド・イラン人も、少なくともその一部は小アジアに足跡を残しており、かなり遅れて、アナトリア人と同じ

ルートを取ったようにも考えられ得る。しかし、言語学的に見れば、ギリシア人の祖先とインド・イラン人の祖先は長期間にわたって接触を続けていたと考えられる。他方、歴史時代にイラン諸種族は黒海北方とアジアのさらに遠方のステップ地帯に見られ、非常に古い時代には明らかにシベリアとの境界地帯でフィン・ウゴール族と接触を持っていたことを考慮すると、インド・イラン人は様々なルート、つまり黒海の西側と東側、及びカスピ海の両岸を通って移動を行い、最終的に主要な流れが合流してイランとインダス渓谷に達したと想像すべきではなかろうか。

原　註

［1］以下で述べる言語研究すべてについて、下記の語源辞典を参照されたい。

Oscar Bloch & Walter von Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la langue française*, Paris, 1932.

Emile Boisacq, *Dictionnaire étymologique de la langue grecque*, 4e édition, Heidelberg, 1950.

Carl Darling Buck, *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*, Chicago, 1949.

Joan Corominas, *Breve dictionario etimológico de la lengua castellana*, Madrid, 1961.

Albert Dauzat, Jean Dubois & Henri Mitterrand, *Nouveau dictionnaire étymologique*, Paris, 1964.

A. Ernout & Antoine Meillet, *Dictionnaire étymologique de la langue latine*, 2e édition, Paris, 1939.

H. S. Falk & Alf Torp, *Norwegisch-dänisches etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg, 1911.

Sigmund Feist, *Vergleichendes Wörterbuch der gotischen Sprache*, 3e éd., Leiden, 1939.

Elof Hellquist, *Svensk etymologisk ordbok*, Lund, 1922.

Ernst Klein, *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*, Amsterdam, 1966.

Friedrich Kluge, *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*, Strasbourg, 1910.

Max Vasmer, *Russisches etymologisches Wörterbuch*, Heidelberg, 1955.

［2］フランク王国におけるロマンス語とゲルマン語の二言語併用が及ぼしたその他の影響については本書【5.77（原著p.94）以下】を参照のこと。

［3］主としてこの点で恩恵を受けたのは Edgar C. Polomé (red.), *The Indo-European in the fourth and third millennia*, Ann Arbor, 1982 に示されたデータである。関連資料のその他の出典は Guy Rachet, *L'univers de l'archéologie, technique, histoire, bilan*, 2, Verviers,1970 及び André Leroi-Gourhan et al., *La préhistoire*, Paris, 1966 に載っている。年代の推定はその著者によって大きく異なるが、【新しい著作ほど】より古い時代を想定する傾向がある。

［4］この語根は英語の year, ドイツ語の Jahr（「年」、本来は「新年」）のそれと同じであるらしい。冬が死んだ後に、新しい年を復活させるのが hero ということになる。この点については Jean Haudry, Héra 1, *Etudes indo-européennes* 6, 1983, pp.17–41, Héra 2, *ibid*. 7, 1983, pp.1–28, Héra et les héros, *ibid*. 12, 1985, pp.1–51 を参照。

［5］カモニカ渓谷にある岸壁の浮き彫りは恐らくこれに由来する。Cf. Isabelle Turcan, *Etudes indo-européenes* 6, 1983, pp.1–15.

［6］これらの地図は Marija Gimbutas, *The Indo-Europeans in the fourth and third millenia*, p.53, 54, 55

に載せられたものをそのまま使わせて戴いた。

［7］あるいは、Vladimir Georgiev が *Introduction to the history of the Indo-European languages*, p.107 で述べているように、この南下をずっと以前のこととみなして、彼らが非常に古い時代にギリシアを占領したペラスギ人であると考えるべきなのであろうか？ペラスギ人を古く侵攻した印欧人であると考えたがっている人たちも一部にいる。以下原著 p.79【p.73 の誤り；5.26】を参照。

訳　註

（1）pont-i-「橋」(単数主格 pōns < *pont-s)の部分については次の訳註を参照。-fex < *-fec-s < *-fac-s には fac-i-ō「する、作る」の語根が用いられており、これはゼロ階梯たる IE *dhə- に遡る。ラテン語 a は語中の閉音節で e となるのが常則である（Palmer 221)。正常階梯 *dhē- は完了 fēci 等に現れている。F faire はもとより、E do、G tun、R де(ла)ть 等も同語源である。

（2）正常階梯は *pent-「歩く、進む」と再建される。名詞的な形である o 階梯より *pont-「進むべき場所(∴道　etc.)」が得られる。ギリシア人は移動の手段として船をよく用いたことから、後者に起因する Gk. póntos は「海路」さらには同名の神の名にも現れているように単に「海」の意味にまで発達した。R путь「道」< *pǫti < *pont-i- 参照。E find や G finden（<Gmc. *finþan）も *pent- に起因し、その原義は"come upon"とされる(Watkins 49)。

（3）いわゆる linguistic paleontology と呼ばれる分野である。日本語で書かれたものとしては Schrader（風間訳1977）や風間(1993)等がある。参照されたい。

（4）この要素はまた mermaid（<mere+maid）に現れている。同じ構成の G Meerjungfrau も参照されたい。

（5）さらなる語源は不詳とされている。

（6）Gmc. *haþ-j-anが再建される。E have, G haben等に現れるGmc. *haþ-ēnとともに IE *kap-"to grasp"(Watkins 29)に遡る。この語根はまた Lat. capiō「捕らえる」(*cap-j-ō >E capture, catch, F chasser, etc.), Gk. káptō「急いで捕まえる」(< *kap-j-ō)等にも見られる。

（7）Pokorny(748) には該当例は載せられていない。Skr. maryā "mark, limit, boundary"およびそこからの派生語 maryādā "frontier, border, band, shore, etc."等が該当すると思われる。ただし Monier-Williams(791)はこれらを márīci "a ray of light", marút "the storm-gods"に関係すると見て、本来は "something clear or shining"の意ではないかと記し、IE *mori-との関係を想定していない。また、同所には maryādā を marya "man"+ad "eat"+ā と見て、"'devouring young man' who are defending boundaries"と解釈するというおもしろい民間語源が紹介されているが、これはもちろん戯言である。Mayrhofer(1963:597f.)もSkr. maryādā等を IE *mori-と関係付ける説には否定的で、むしろ「境界」の語義を重んじて Av. marᵒza- „Mark, Grenzgebiet", Pers. marz „Mark", Goth. marka „Grenze, Mark"（<IE *merg- "boundary, border"（Watkins 42))との比定を有望と考えているようである。

（8）正常階梯を記せば IE *dhel-. thálassa はゼロ階梯 *dhl̥- より。成節ソナントはギリシア語では a を伴って現れるのが常則である。以下の例 E dale, G Tal, OCS dolъ には o階梯 *dhol- が予想される。

（9）原著では≪puits≫「井戸」とあるが訳語としては不適当かと思われるので Срезневский や Sadnik 等を参照の上、本文のように改めた。例えばロシア語 долина「谷、盆地」を参照。

（10）limén「波止場、入り江」、leimón「牧草地、湿地」あるいは Lat. līmus「泥」等とともに IE *lei-m-（語根は *lei- "slimy"（Watkins 35f.))に起因すると考えられる。s-mobile を添頭した形が E slime, slip, G Schleim「粘液」, OCS slina「唾液」等に現れている。R слюнаの下線部の母音はплюю「私は唾を吐く」からの類推と説明されている（Черных 1993: II, 178）。

（11）現に例えばG Moorは現在でも湿地を表す。原著者はここから得られるGmc. *mora-をIE *mor-o-に遡

るとみなし、その語根を *mor の延長された形と考えている。Pokorny, Onions, Hoad, Pfeifer 等もこのような考えを採っている。ただし、その延長の理由は判然としない。他方、Gmc. *ō はIE *ō ばかりか *ā の反映とも考えられるため、Gmc. *mora-をLat. mānō「流れる」と比定し、IE *mā- "damp"(Watkins 38)＋-ro-と分析する案もあり、これに類する説明が例えば研究社大英和にも載せられている。

(12) E beech はGmc. *bōk-ō-（>Buche)より j を加えて派生した *bōkjōn に起因するとされる。Dan. bøg も同様と思われる。

(13) 例えば R buk「ぶな」. ただし、ゲルマン語からの借用は疑い得ないにせよ、直接に何語起源かを決定することは困難である。詳細は割愛せざるを得ないが、スラブ語で母音 u が現れているため、最も期待されるゴート語と古高ドイツ語からの素直な借用と考えることは無理であろう。他方、ラテン語 fāgus はケルト語へ、例えばIr. feá（旧正字法 feagha）/fʲa:/ "beech"の形で借用されている。詳細は不明だが、Ir. fáibhile /fá:vʲilʲə/ "beech"も同じ語に起因しているのかもしれない。その他のケルト語の例は Lewis-Pedersen(1937:60) 等を参照。

(14) 原著では「コナラ（chêne）の一種」。本文のような訳語を用いたのは、樫は相対的南方に、楢は北方に生育するため、どちらも訳語としては不十分であり、両者のカヴァー・タームが好ましいと考えたからである。古典ギリシア語の文語の基礎となったイオーニア・アッティカ方言では ā は一般に ē に転じるため、IE * bhāgos に一致する。

(15) 不定形は一般には phageīn である。

(16) この考えに従えば語根は *bhāg- のゼロ階梯 *bhəg- の反映と解釈されることになるが、一般的には *bhag-「分ける」(e. g. Skr. bhájati)から説明されることが多い(e. g. Gemoll, Watkins)。

(17) e. g. R бузина́, dial. боз (Даль), Uk. бузина́, Br. бузі́на́; Bg. бъз, SCr. báza; Cz., Pol. bez「ライラック」, etc.

(18) 内的再建の見地からは CS *bъzъ が予想されるが、R, Uk., Br.の母音 u の原因とともにそのさらなる語源は不詳。印欧祖語から継承されたスラブ本来の形であれば IE *bhāg->CS *baz-あるいはゼロ階梯 *bhəg-> *boz-が期待され、母音の不一致が全く不可解となる。一説にイラン語からの早期の借用が説かれるがその詳細ははっきりしない。Черных(1993: I, 119)参照。

(19) 以下に述べられるようなデータから、*ghdū-（Pokorny; *ghdhū- のことと思われる）, *dhghū-（Watkins）のような再建形が提案されている。訳註23を参照。

(20) 前訳註で挙げた再建形の語頭のghdhやdhghを指すと思われる。

(21) これは複数対格の形に見える。単数主格は通例は ikhthús.

(22) j は[dz]を表す。Schmitt の転写法では jowkn と綴られる。

(23) これは古くから行われた比定らしいが、難問である。*ghdhū- から出発すると、前置母音 i の問題はあるが、その点に目をつぶればギリシア語では *ghdh が通常通り無声帯気音として保持され、問題の形に到達できる。他方、バルト語とアルメニア語の形には *dh が現れておらず、むしろ *dhghū- から語頭の dh が脱落したとみなすほうが容易である。どちらを祖形と考えるにせよ、メタテーゼを想定する必要がある。付け加えれば、これらとは全く異なる祖形を想定することも可能かもしれない。バルト語を重視すれば *ghū- あるいは *ghu-k^{w}- が、アルメニア語を重視すれば *ghŭ-g^{w}- が想定されうるし、高津(1954:81)によればギリシア語形は *ghyū-（<√ *ghei-?「冬；進ませる」（Watkins 21)）から導かれるのかもしれない。Gemoll(395)の指摘するスウェーデン語の gös "pike perch"< *gjus(?)も *ghyū-を支持する傍証となる可能性がある。また、これと同種の語頭子音の問題が Gk. khthón, Lat. humus, Skr. kṣās, OCS zemlę「大地」の祖形を想定する場合にも生じ、*ghdem-（*ghdhem-?, Pokorny), *dhghem-（Watkins）等が提案されている。Hitt. tekan, gen. taknas, Toch. tkam が発見されたことにより、初源的な形は *dheghom-, *dhghem-/ *dhghom- という二音節語基とみなすのが得策らしい(Szemerényi 1990^{4}: 54)。問題の「魚」についても同種の扱いが可能かもしれない。

(24) CS *ryba（<PS *rūbā?）の語源はよくわからないが、①ここに記されているように OHG rūp(p)a（< *rūbā?）と結び付ける Mikkola の説、②Lat. rubēta「がまがえる」と結び付ける Kluge らの説、

③рыть（<√ *reu (ə) –）「たたく、掘る」に由来すると見て「穴を掘って（そこに追い込んで）魚を取る漁法」が原義であったとする Vaillant の説等があるらしい（Черных II, 129f.)。②は長母音 ū(>CS y）が導かれない点が、③は語義が大きな難点であり、この中では原著者と同じく①が最も有望と考えるべきであろう。

(25) 原著者はIE *mad– "moist"（Watkins 38）に起因すると見ているのであろう。Lat. madeō「濡れる、酔う」, Gk. madáō「溶ける、毛が抜ける」, E meat（Gmc. *mati–< *mad–i–)等と比定される Skr. mad–「喜ぶ、酔う、湧く」（原義は恐らく「濡れる」(Monier–Williams 777)）から、 *mad–s–ya–> matsya のように派生したと考えるのが素直であろう。詳しくは Mayrhofer(1963: 566f.)参照。

(26) すなわち *pisk–. *peisk– のゼロ階梯と考えられている。

(27) < *pisk–i–; Cf. F poisson.

(28) <Gmc. *fisk–a–< *pisk–o–; Cf. E fish, G Fisch.

(29) R пестру́шка < пёстрый「斑の」.

(30) ロシア、ウクライナ、ベラルーシ以外のスラブ語は後者の形のみを持つ：e. g. Cz. pstruh, Pol. pstrąg, Bg. пъстърва, SCr.pȁstrma<CS *pьstr–「斑の」; Rum. păstrăv、 Hun. pisztráng はいずれかの段階でいずれかのスラブ語から借用されたのは明らかである。

(31) 一般にはGmc. *karpa（E carp, G Karpfen）が後期ラテン語 carpam（対格）を経て各国語に広まったとされているが、*karpa のさらなる語源は不詳。ゲルマン語らしくないという根拠は次の点であろう。想定されるゲルマン祖語から素直に印欧祖語の形を再建すると *gorb–o– あるいは *garb–o– となってしまい、単純な有声閉鎖音が語根の中に並存することはないという印欧祖語の語根構造の性質上、ありえない形となる。言い替えればこのゲルマン祖語の形は印欧祖語に由来しないという点を指していると思われる。

(32) 原義は「残飯の山」。蛇足だが、英語では翻訳借用により kitchenmidden「台所の糞山」、ドイツ語ではそのまま Kökkenmöddinger、ロシア語では翻訳借用 кухонная куча あるいは意訳 раковинная куча と表現される。

(33) 訳註21参照。

(34) *reg–「統べる」の母音を延長した形（延長階梯）とみなされる。

(35) これらはそれぞれSkr. rājaḥ（連声なしrājas)、Skr. mahārājáḥ（連声なし mahārājás)、 Hind. rānī に由来する。最後の語は Skr. rā́jñī に遡り、鼻腔開放[ɻn]が簡略化を受けて閉鎖音部を失っている。

(36) ここでは曲アクセント記号は長音を表し、すなわち rīks を意味する。

(37) 英語の rich はゲルマン語とフランス語の混交とされる。

(38) ドイツ語での呼称 Österreich はその原義を忠実に表している。

(39) 原著では *kuningas となっているが、一般的なゲルマン祖語の記載法に改めた。5.66に記される Verner の法則によって、直前にアクセントのない s はゲルマン祖語の段階で有声化して z になったはずだからである。これは一種の弱音化現象と考えられる。このような z はさらに r に転じる。

(40) これに限らずゲルマン祖語に非常に近い形がフィンランド語に受け継がれている場合が多々ある。詳しくは Thomsen 等を参照されたい。

(41) 連続して現れる n の片方をハプロロジーによって失っていると考えられる。英語では前者の n を、ドイツ語では後者を脱落させた；神山(1995:197) 参照。

(42) IE *gen–「生む」. ゼロ階梯の *gn̥–より規則的にGmc *kun–が得られる。g>kはグリムの法則(5.61ff.)によって説明される。成節ソナントはゲルマン語では一般に anaptyxis u を伴う。Gmc. *kuningaz の語義は"son of the royal kin"(Watkins 19),"scion of the (noble) race"(Hoad 253) 等から発達したと考えられる。

(43) *teutā–"tribe"(Watkins 71) に遡るが、これは恐らくさらに IE *teu–"to swell"(*ibid.*) より分詞を作る–t–を付加して構成されたと考えられる。Goth. þiudans と平行する形が OE þēoden にも見いだされる。

(44) deutlich「明かな」や2.14に登場したチュートン人という名前も、そして当然だが英語の Dutsch 等もこ

こに由来する。thiudiska を借用（接尾辞は翻訳借用）したスラブ語 CS *tjud-jь については第II章訳註8を参照。

(45) ドイツ名 Karl より CS *karlьが期待され、これが本文のロシア語や Cz. kral, SCr. krâlj 等に規則的に転じている。スラブ語内の変遷については Mareš（神山訳1996:122)等を参照。これ以外にも「王」に相当する語として、上記 *kuningaz の借用語であるPS *kuningo->CS *kъnędzь>e. g. R князь, Cz. kněz, SCr. knēz と、Julius Caesar に由来する PS *kaisarj->CS *cěsarь>R царь, SCr. càr, Cz. car（ロシア語より）の二語がある。

(46) 以下のような語より *arə-「耕す」が再建される。Lat. arō, arāre, Gk aróō, Lith. ariù, árti; OCS orjǫ, orati; ralo「すき」,< *arə-dlo；その他の語派については後述される。

(47) e. g. Goth. arjan, OHG art「開墾した土地」、Ols. arðr「すき」, etc.

(48) e. g. Late OE plōh, ON plógr, OS plōg, OHG phluog<Gmc. *plōɣaz.

(49) 印欧祖語には語頭の *b はほとんど現れず、グリムの法則を経たその反映であるゲルマン語の *pも語頭には原則として現れないはずである。したがって問題の *plōɣaz は印欧祖語に直接由来する語彙ではなく、何れかの言語からの後代の借用語である可能性が高い。さもなければ、何らかの強意に由来すると思われる変則的音韻に起因する可能性もないではない。研究社大英和 plough の項目に Lat. plōvus, plōvum とあり、ラテン語からの借用であることが示唆されているかのようであるが、筆者が参照した限りではこの語が記されたラテン語辞典は見当たらず、この説の出典も不明である。

(50) 文字通りには「背の高い石」を表し、考古学ではメンヒル、あるいは立石と呼ばれる。カルナックにあるような多くのメンヒルを連ねたものは特にアリニュマン（直線状列石）と呼ばれる。

(51) 複数の巨石を立てて、その上にもう一つの巨石を横に置いた形式を取る。巨石墳、支石墓とも呼ばれる。ブルトン語で文字通りには「石の卓」を表す taol＋maen（緩音化によりtaolvaen）に由来するというのが有力な語源説である。

(52) プラハの北北西にある村 Unětice. 青銅器時代初期の遺跡が残されている。ここを中心とし、ドイツ、ボヘミア、オーストリアに跨る文化はドイツ名アウニェティツ（Aunjetitz）の名で呼ばれるのが一般的となっている。

(53) いわゆる線文字AとBが含意されている。周知のように、後者は1953年に Ventris によって解読され、ギリシア語（いわゆるミュケーナイ・ギリシア語）を記した音節文字であることが明らかとなったが、前者は未解読である。5.49参照。ここに記された原著者の見解を敷衍すれば、あるいは線文字Aが記しているのは「ドナウ平原語」(?) ということになろうか。

(54) 原註4に記された文献は手配中であるが、現時点では未見につき詳細は不詳。一般には year, etc. は IE *yēr- "year, season"に、hérōs や Héra は IE *sēr-：√ *ser- "protect"（Watkins）に遡るとされる。

(55) 第二版で付け加えられた。

(56) したがって縄文土器文化は戦斧文化とも呼ばれる。

参考文献（訳註・補遺）

Collinge, N. E. 1985. *The Laws of Indo-European*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamin.

Dillon, Myles & ó Cróinín, Donucha. 1961. *Irish*. Teach Yourself Books.

Gemoll, Wilhelm. 1962[8]. *Griechisch-Deutsches Schul- und Handwörterbuch*. Durchgesehen und erwitert von Karl Vretska mit einer Einführung in die Sprachgeschichte von Heinz Kronasser. München/Wien: G. Freytag Verlag/Hölder-Pichler-Tempsky.

Hoad, T. F. 1986. *The Concise Oxford Dictionary of English Etymology*. Oxford University Press.

井上幸和.1980.「古プロシア語 Kathechismus[I,II,III]にみえる，統辞論的，文体論的異動について１（研究編）」『神戸外大論叢』Vol.31, No.3.

———.1986.『バルト・スラヴ研究1 バルト・スラヴ語彙対応の研究』神戸市外国語大学研究叢書 第17冊.

Kinder, Hermann & Hilgemann, Werner. 1974². *Atlas zur Weltgeschichte*. München:Deutscher Taschenbuchverlag.日本版：成瀬治監修『カラー世界史百科』平凡社.1978.

岸本通夫.1969.「印欧語族の移動とヒッタイト帝国の擡頭」『岩波講座 世界歴史１．古代オリエント世界 地中海世界Ｉ』岩波書店.

Mayrhofer, Manfred. 1953–1980. *Kurzgefaßtes etymologisches Wörterbuch des Altindischen*. Heidelberg: Winter.

Monier-Williams, Monier. 1899. *A Sanscrit-English Dictionary*. Etymologically and philologically arranged with special reference to cognate Indo-European languages. New edition, greatly enlarged and improved with the collaboration of E. Leumann, C. Cappeller and other scholars. Oxford University Press.

柴田三千雄、樺山紘一、福井憲彦（編）. 1995.『世界歴史大系 フランス史 １』山川出版社.

Трубачев, О. Н.(ред.) 1974–. *Этимологический словарь славянских языков*. Праславянский лексический фонд. Москва：Наука.

（1997．9．11 受理）